



魔祿羅王像 この王は美出尾のシンボル像で、5つの目を持った美出尾王である。そして、この王は琵琶を奏する首像一体の王で、密教界における映像の王である。以後おもしろおきを。

中島興の ビデオソフト学入門 ⑧

●火的撮影法実践篇

「木・火・土・金・水」という五元素が、宇宙を構成するという古代中国の「五行説」によって、宇宙や人間を考え、そして「ビデオソフト作り」の方法論を探る『ビデオソフト学入門』。前回まで「木的撮影法」について解説してきたが、今回より「火的撮影法」——ヒナリオ（火成法）実践術について考察してみたい。

前回まで木的人間（注1）のための木的撮影法、キナリオ法（木成法）を展開してきたが、今回から火的人間のためのビデオソフトづくり、ヒナリオ法（火成法）について、講座のフレームを進めることにする。

火は「五行説」の「木・火・土・金・水」という五元素のなかでも、これといって「形」を持たない、いわば自分の形をいつも変化させてい

るといところに、大きな特長を持つ。木のような一定のきまった成長プロセス（注2）がなく、そのため、その行動や創造性はきわめて不定形である。

しかし、火は水以外のすべての物質を燃やして、その形を変化させることができる。この、物を変化させるということが、火（火的人間）のすぐれた能力なのである。そしてまた、

常に火的人間は炎のように動いており、走りながら考えるという特殊な才能を持っている。そして、燃える物はすべて燃やしてしまい、「物を変化させる」ということが創造であると思う本能がある。つまり、木が火をもって灰になるように、燃焼させて別な物質に変化させるという「燃焼度」の高いクリエイティブワークが、その特長なのである。



ヒナリオ実践術①

ヒナリオ法(火成法)におけるソフトづくり

では、ここでその火的人間がビデオソフトを作る際のキーポイント、ヒナリオ実践術を紹介しよう。

- ①方式や様式を作るな！
- ②変化は美德なり
- ③完成度という言葉はヒナリオ法の辞書にはない！
- ④始まりがあって、終わりがある作品は作るな！
- ⑤プロセスのみが作品
- ⑥一瞬のイメージを狙え！
- ⑦動きながら、歩きながら、走りながら考えよ！
- ⑧結果を求めてはいけない
- ⑨行為だけが、火的人間の美意識なり
- ⑩人の心に火をつけて、その人の心を燃やすことが美なり

⑪結論や結果を残さず去れ！ その場かぎりで終わり

⑫イベント、パフォーマンス、パフォーマンスが火的人間の能力開発の濡れ場なり

⑬フィリングを具体化してはいけない。常に抽象論で押し通せ！

⑭ドキュメントやドラマは敵なり

⑮火的人間のソフトは、常に抽象的な短編ビデオ

⑯一瞬、美しい、花火のような作品を狙え！

⑰オリジナリティーなど、火的人間にはない

⑱発想の根源は木・金・土にあり。木を燃やし、金を熱し、土を焼く、この形が変わるプロセスに注目せよ！

⑲結果は灰なり、燃焼のプロセスが美なり。灰はただの灰にすぎず、変化のプロセスがソフトなり

⑳燃やすエネルギーが美なり。編集することを考えてはいけない。映画やテレビのモンタージュ理論を切りすてよ！

㉑フィーリングを発掘りに徹せよ！

㉒1回見せたら、2度見せるな！

㉓作品は短かくても、常にエネルギーがみなぎっていないければならない

㉔電光一発！

㉕コンピューター・グラフィックスも火的人間のアートワークである。CF(コマーシャルフィルム)も火的人間のフィールドなり

㉖感性よりも身体に感じる生の感

覚を信じよ!

②虹、オーロラ、日食、蜃気楼、

幻覚、夢、流星、火の玉、ネオン、
野火、電光、レーザーなどがヒナ

リオ法の「火的媒介要素」、作品の
契機なり



ヒナリオ実践術②

ヒナリオ法の撮影テクニック

前述したヒナリオ実践術は、どちらかという、ソフトを作る際の発想法であったが、さらにもう少し具体的な実践術、撮影テクニックを紹介しよう。

①感じた時が撮る時、感じたら撮れ！ 意味や意義を感じたら撮るのをやめよ

②アツ切り撮りが最大のキーポイント。カメラアングルにこってはいけない。いきなり撮りが作品のクオリティを上げる秘訣

③ゲリラ撮りがヒナリオ撮りの成功の鍵。常識撮りという言葉はヒナリオの辞書にはない

④ファインダーをのぞくな。ノー

ファインダーで撮るのがヒナリオ撮影術の最大の技術

⑤前もっての打ち合わせや演出・台本は不要

⑥撮る前に考えるな。撮っている最中も考えるな。撮り終わっても、何に使うかを考えてはいけない。まず、他人に見せ、意見を求めよ



ヒナリオ法における ノーファインダー撮影術

ヒナリオ法による撮影では、台本も演出も、そしてまた、どう撮るかというファインダーテクニック（構図）も、ズームワーク、パンニングなどのカメラテクニックも不要である。しかし、使用するビデオカメラは、できるならばレンズの交換できるものが良い。なぜなら、ヒナリオ法ではテクニックよりもどれだけ対象に迫られるか、接近できるかが最

大のキーポイントだからである。これを実践するには、対象に近くまで迫れる広角レンズの方が良いわけである。

さて、まず、その撮影法、スタイルであるが、ビデオカメラを小脇に抱きかかえるようにして持つこと。ビューファインダーはあらかじめ、はずしておくことが肝要である。ビデオで撮影しているということが、

相手に分かってしまつては、ヒナリオ法に反するので、自分はただカメラを小脇にかかえているのだという雰囲気が必要である。相手にカメラを意識させたら、ヒナリオ撮りは失敗する。VTRに黒いテープを貼って、テープの回転が見えないようにすることも、相手に悟られずに撮るためのコツである。



ヒナリオ撮りは 常に自由で、勝手撮りが流儀

ヒナリオ撮りには、映画やテレビのようにルールがない。そこで、ヒナリオ法を実践するためには、変幻自在の「火」の特性にならぬ、また、密教の「火炎曼陀羅」を想像しながら、自分の流儀をのみだすことである。写真1は、そのヒナリオ法の一例である。まず、この撮り方の火的所以はファインダーをのぞかないことにある。ファインダーをのぞいて

人を撮ると、相手は必ず撮られていることを意識する。いかに、相手にカメラを意識させないで撮るかが、ポイントである。そのため、筆者はビューファインダーとカメラを分離させ、写真2のように目の前にビューファインダーをセットし、頭からすっぽりと黒い布をかぶってカモフラージュした。こうすると、撮られる側は、まさか布をかぶった人がビ





デオを撮っているとは思わないし、
ましてや自分が撮られているとは夢

にも思わない。また、こうした撮影方法の方が、対象をはるかに惹きつける。撮られる側が不思議がって画面に飛びこんでくるのである。撮る側と撮られる側の逆転が、この手法の面白さである。一度、ためしてみることである。それがまた、ヒナリオ法を成功に導く最大条件である。

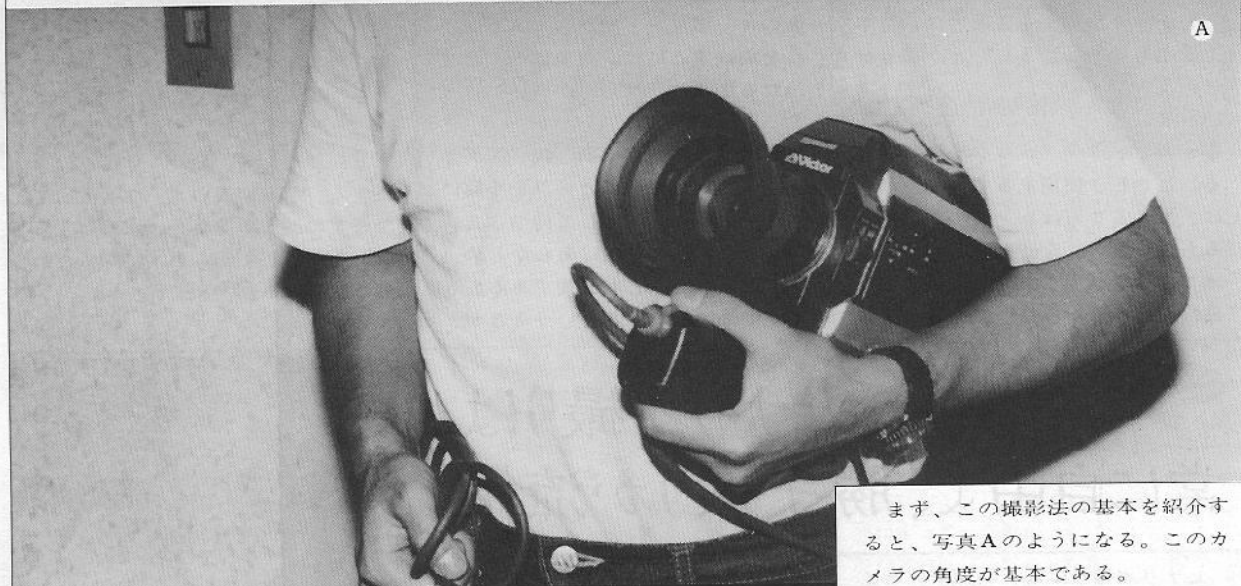
また、使用するビデオカメラがビューファインダーを分離できない場合は写真3のように黒い布を頭からかぶって撮ると良い。この格好で街に出ると、撮られる側が不思議がって、逆に撮影者に質問してくる。その場合、撮影者はカメラを45度の角度にし、小脇にかかえこんで撮ると良い。バックや買物カゴなどを一緒



に持ち、かかえて撮ると、よりうまくカモフラージュできる。カメラは目の高さにまで持ってきて、撮るものだという固定観念があるので、これはその固定観念を逆手にとった、まさにヒナリオ的撮影術なのである。

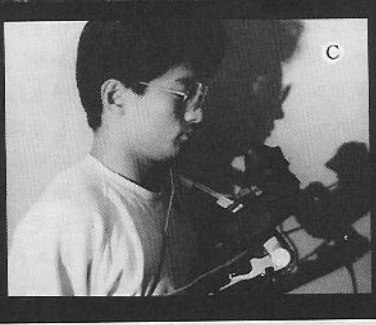


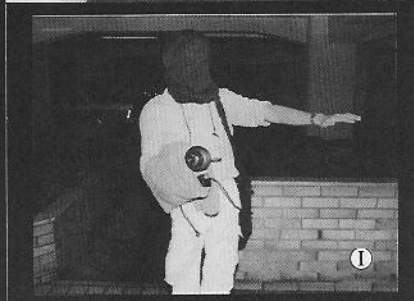
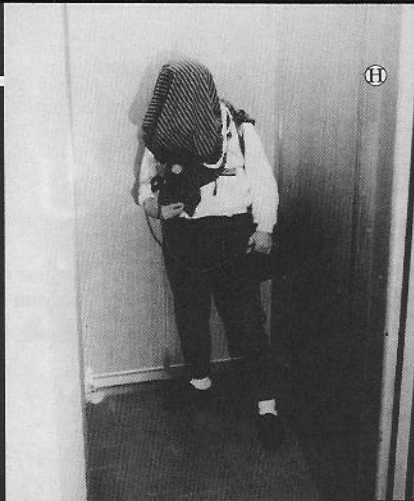
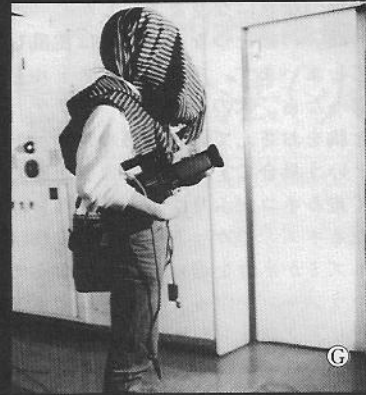
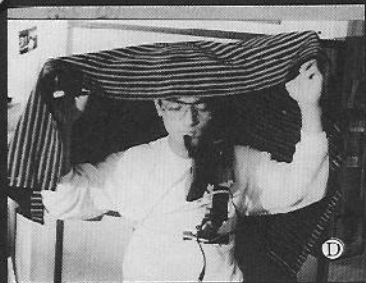
ヒナリオ的撮影スタイル実例



まず、この撮影法の基本を紹介すると、写真Aのようになる。このカメラの角度が基本である。

〔1〕まず、写真B、Cのようにビューファインダーを目の前にセットする。セットの方法は自由、ヘルメットに固定したり、この写真のように背から胸にかけて固定させて、ヒモで結ぶのもいい。そして、次に写真D、Eのように、布を頭からすっぽりかぶる。布をかぶったら、写真F、Gのように、ヒモで首のまわりを軽





今回は「ヒナリオ撮り必殺18手」を紹介する。この撮影法は既成観念にとらわれず、自由に勝手に撮ることがポイントである。まずは、実践してみる。それがヒナリオ的撮影法を体得する早道である。言葉や文字では全部を表現することができないし、また、文字にしてしまえばヒナリオ法の面白さは半減してしまう。では、次回の「必殺18番！ヒナリオ撮り」をお楽しみに。

(注1) 自然は木・火・土・金・水という五つの元素で成り立ち、自然もそれらの五つに分けられるという古代中国で生まれた「五行説」の考え方をもとに、このビデオソフト学は進められている。たとえば、木星や土星、金星といった「五つの星」、人間に目を転じれば五体、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）というように、すべてを「五つの元素」をもとに分析し、世界観を形成する。この考え方に至って、人間の性格を木的性格、火的性格というように五つに分類し、そのタイプに応じたビデオソフトづくりをここでは考察する。さて、その人間のタイプであるが、木・火・金……といった物の存在形態を分析すると、そこから抽出された特長が不思議と人間のさまざまな性格にあてはめられる。たとえば「雑草のようにふまれてもふまれてもくじけない人」「ウドの大木のような人」……といったように。今回、展開する「火的人間」とは、火のような特長をもつ人である。たとえば、火が燃えるものがないと存在しないように、何か燃えるもの（他者）がないとその存在を主張できない人、火がある時間のなかで燃えつきてしまうように移り気な性格の人、といった具合である。詳しくは第1号参照。

(注2) 木は種(点)から出発し、芽(線)を作り、枝(線)を作り、実(点)を結ぶ。このように木の成長プロセスは点から線、あるいは枝が分かれるように、線から線(2本)といった一定のパターンを持つ。木的人間は自己のビデオソフト作り、クリエイティブワークにこのパターンを導入するとうまくいく。詳しくは第4、6、7、8号を参照。

くゆわく。写真Hができあがり。エレファントマンといったイメージであるが、これでビデオを撮っているとはまったく思わないだろう。
 [2]ビューファインダーとカメラが分離できない場合は、このスタイルがベスト(写真I)。
 [3]また、布をかぶるのがはずかしいという人は、写真Jのスタイルが良い。しかし、このスタイルはあまりユニークではないし、撮られる人

の興味を惹くということができない。箱でもかぶった方が、ヒナリオ的撮影はやりやすい。
 [4]写真Kはカメラのポジション(角度)をトレーニング中の神崎里美さん。写真Lは失敗例。写真Mのような角度が良い。ヒントも対象に合わせてすばやくセットできるように練習しておくことが、ヒナリオ的撮影法のコツ。